

秋田の天然資材を活かし、ブランド力をアップ

あきたで生きる～秋田の地域資源を活用し、秋田で暮らし、秋田を活かす取組～



SENTE (センチ)

(秋田市)

代表 沢田石 武瑠

たける

経営概況

経営面積 | 田:0.1ha

畑:3ha

作物 | キャベツ、ナス、九条ネギほか

構成員 | 2名、臨時雇用有

販売先 | スーパー、飲食店、直売



SENTE

秋田市で、代々農業を営んでいた祖父の引退を機に実家に帰り、新規就農した人がいます。土づくりに力を注ぎ、土壤に合った野菜作りで人気を高めており、地元の商業高校から講師に招かれオリジナル商品開発の協力や、市や企業等と連携した収穫祭「KOCCHA KE FEST(こっちゃけふえすと)」を企画するなど、秋田に新しい風を吹かせています。

▶ きっかけ

代表の沢田石さんは、1907年から続く農家の5代目として生まれ、幼い頃からいずれは実家の農業を継ぎたいと思っていました。「一度、外から秋田の農業を見た方がよい。」という祖父の言葉に従い、東京農業大学及び大学院へ進学し、「農業と経営」について深く学び、平成29年に秋田に帰りました。



●本場京都での研修で技術を身につけ、「九条ネギ」を生産しています

その後、秋田市園芸振興センターで野菜栽培の技術等を身に付け、就農にあたり、「ブランド経営」と「土壌研究」の2つを強く意識し、SENTE を興しました。

▶ 取組

「ブランド経営」では、商品とブランドの魅力を上げるため、デザイナーと連携しブランド屋号として「SENTE」のロゴデザインを作りました。

「土壌研究」では、秋田の天然資材である秋田杉の炭と木酢液、横手の八木沢白土、男鹿の海洋水が生んだにがりなどを活用することで、土壌と作物に好影響をもたらすことを発見しました。



●秋田の天然資材サンプルを前に、土づくりの重要性を語っていただきました

生産は露地とハウスで栽培する野菜が中心ですが、生産資源を有効に使いながら、1年を通じて出荷できるよう少量多品目栽培を心がけています。出荷先は、主に県内のスーパーや飲食店ですが、美味しいと評判となり、バイヤーからはもっと欲しいと言われていました。

また、技術を磨き美味しい野菜を作るため、冬期間は県外の先進農家に出かけています。外から秋田を見ることで、足りないものに気づくことが多いそうです。



●土づくりの成果は、ずっしりと重い「ナス」にも現れています

▶ これから

新規就農者が相談できる相手は限られているので、日常的に情報共有できれば、個々のレベルアップにも繋がることから、県内の新規農業者同士でディスカッションできるような場が欲しい。そうした関係の中から、品目ごとのリレー出荷など、新たな取組を始められたらと話していました。



●ブランド屋号の「SENTE」のロゴデザイン。「SENTE」は、「Special・Eco・Natural・Technology・Each」の略語です。「先手」を取るという意味にも掛けています



自給たい肥を使った循環型農業をやってみたい

あきたで生きる～秋田の地域資源を活用し、秋田で暮らし、秋田を活かす取組～



阿部 春華
(雄勝郡羽後町)

経営概況

経営面積 | 田:2.2ha
 経営形態 | 繁殖牛経営
 飼養頭数 | 繁殖和牛約 60 頭、子牛年間約 40 頭
 施設 | 牛舎2棟
 作物 | 牧草
 労働力 | 2名、臨時雇用あり
 販売先 | JA 主体

父親の急逝により、大学を辞めて母親と共に家業の畜産に取り組む女性があります。就農後、人工授精師や大型特殊免許の資格を取得し、種付けや牧草の収穫を自ら行い、繁殖牛経営に取り組み今年で3年目を迎えました。将来は、家族みんなで循環型農業での野菜栽培や飼養頭数を増やし、規模拡大したいという夢を持っています。

▶ きっかけ

阿部さんは、中学3年生の時、我が家に新しい牛舎が整備され、畜産に取り組む両親の姿を見て自分も将来携わりたいと思い、普通高校卒業後に北海道の畜産系の大学に進学しました。2年生となり、専門的に畜産の勉強が始まろうとした矢先に父親が亡くなり、家業の畜産を母親1人でするのは大変だろうと思い、この年に大学を辞めて就農しました。



●両親の働く姿を見ていた牛舎

就農1年目は、畜産についての知識がほとんどなく、分からないことばかりで、これまで全ての種付け作業を人工授精師の母親が行っていたこともあり、人工授精師を目指して県の講習会で学び、資格を取得しました。

▶ 取組

2年目からは、繁殖牛の種付けから分娩を自分が担当し、子牛の育成は母親が行い、作業を分担して取り組んでいます。特に受胎率を上げるため太らせないことや、発情を見逃さないように、尾根部にマーカで印を付けて牛をよく観察しています。



●牛をよく観察することで健康状態が分かります

また、大型特殊免許を取得し、牧草の収穫などは自分が行っていますが、牧草を栽培している水田は小画であり、畦畔が多いため大型機械での作業は大変です。

振興局のアドバイスで、秋田県の「コロナ関連緊急対策事業」や「若い担い手の和牛力向上支援事業」を活用し、牧草をほぐす機械や給飼機を導入

し、家畜保健衛生所からの繁殖検診巡回指導などの支援もあり、作業が楽になりました。

▶ これから

現在は、近隣農家からたい肥と交換で稲わらを頂いていますが、将来は自給稲わら(減農薬等の水稻栽培)を牛に給餌し、そのたい肥を使った循環型農業に取り組み、アスパラガスなどの野菜を栽培してみたいと思っています。

畜産は飼料高騰や子牛価格の低迷など大変なことが多くなってきましたが、農業系の学校に進学している妹も畜産に携わりたいと話していますので、家族みんなで取り組み、今の倍ぐらいの頭数に規模拡大したいという夢があります。



●親子二人三脚でガンバっています！！



生まれたての法人と共に成長

あきたで生きる～秋田の地域資源を活用し、秋田で暮らし、秋田を活かす取組～



株式会社 こっちゃんファーム
(山本郡三種町)

代表取締役 成田 昇

経営概況

経営面積 | 田 20ha
畑 13.2ha

作物 | 水稻、ねぎ、枝豆種子、そば、さつまいも等
構成員 | 役員3名、社員5名、臨時雇用8名
販売先 | JA、地元スーパー等



●成田代表取締役

●良き先輩の成田圭吾さん(左)、高田翔太さん(中央)、成田千尋さん(右)

三種町にある「こっちゃんファーム」は、秋田県園芸メガ団地の一つで、令和2年1月に設立したねぎ栽培に取り組む農業法人です。ねぎ栽培初心者の従業員たちが、「ひよこ」と同じ様に一から成長していくという思いを込めて、「こっちゃん」と命名しました。法人と共に成長する2名の若手就農者からお話をお聞きました。

▶ 就農のきっかけ

高田翔太さん(能代市出身)は、実家が農家で、米や野菜を栽培していたため、子供のときから農業に関心があり、能代松陽高校を卒業後に地元 JA に就職しました。仕事を通じて農家と接するうちに自身でも作物を作りたいと思うようになり、JA を退職後、令和2年4月、「こっちゃんファーム」に入社しました。

成田千尋さん(三種町出身)は、非農家出身ですが、作物を育てることに興味があり、旧能代西高(現能代科学技術高)生物資源科を卒業後、地元種苗会社に就職しました。しかし、農業への思いがあり、以前から面識のあった成田代表の勧めで、就農前に能代市農業技術センターで2年間の研修を経て、令和5年4月、同法人に入社しました。



●ねぎ収穫機の上で選別作業を行う千尋さん

▶ これからの自分たち

高田さんは、主にねぎのほ場管理や出荷作業などを任されていますが、得意分野は、ほ場での機械操作や薬剤散布などです。「これからはねぎだけでなく、他の農作物の栽培にも関わりながら、どんな場面でも的確に対処できる技術を身につけたい。一緒に成長し、励まし合える若い農業者がもっと増えて欲しい。」と話します。



●ハウス内で均平作業を行う高田さん

千尋さんは、高田さんと同じく、ねぎのほ場管理や出荷作業を担当しています。「就農一年目の今年は、ほ場にたくさん足を運び、いろんな農作物の栽培に関わってみたい。自分なりに勉強し、農作物の知識や技術を身につけ、今後は特にオクラの栽培に取り組んでみたい。」と話します。



●ねぎの調製作業を行う従業員の皆さん

▶ 法人の新たなチャレンジ

ねぎを出荷する際は、これまで市販の結束テープを使用していましたが、令和4年に従業員が考案したひよこのキャラクターが目を引く結束テープを導入したところ、一目で同社のねぎと認知してもらえるようになりました。成田代表は、「地域のたい肥や三陸産生牡蠣殻を利用した土づくりなど、環境にやさしい農業、おいしいねぎ作りに努力している。今後も品質や味に責任感を持ち、自信を持って販売していきたい。若手には、経営にも関わるといった人材に育てて欲しい。」と意気込みを語ってくれました。



●トレードマークのひよこがあしらわれたねぎの結束テープ



耕作放棄地を耕し、種を蒔く

あきたで生きる～秋田の地域資源を活用し、秋田で暮らし、秋田を活かす取組～



合同会社秋山里山デザイン
(男鹿市)

代表社員 大西 克直

経営概況

作物 | だいこん、ミニトマト、ナス、
かんしょ、落花生、小豆等
15種類

構成員 | 2名

販売先 | イベントのみ(野菜)



さとやまコーヒー

大学在学中に、男鹿市でコーヒー豆を焙煎し、販売収益を活用して耕作放棄地を耕し、農業に参入した2人の若者がいます。2人はそれぞれ秋田県内の違う大学に通う学生でしたが、あるイベントにスタッフとして参加していたことをきっかけに知り合い、令和3年7月に里山再生のため、合同会社秋山里山デザインを興しました。

▶ きっかけ

バリスタ経験のある大西さん(東京都出身)は、国際教養大学に進学し秋田で暮らしながら自分のルーツのようなどころを作りたいと探していたところ、男鹿の自然や風景に魅了されました。

保坂さん(秋田県出身)は、県立大学で農業の勉強をしていましたが、現場を知るため休学し、男鹿市で借りた耕作放棄地で野菜作りを行っていたところ、イベント先で農業に興味のある大西さんと知り合い、意気投合し一緒に農業を始めました。

2人で農業をするうちに、耕作放棄地をこのままにはいけないといった気持ちが芽生え、里山再生のため「合同会社秋山里山デザイン」を興しました。令和3年10月に男鹿市へ2人で移住し今年で2年目を迎えました。



●里山再生のため、耕作放棄地の雑草を刈り取る2人

▶ 取組

同市の里山の耕作放棄地を再生利用するため、コーヒー豆の販売収益から、野菜の種を購入し、畑を耕し種を蒔き野菜を育てています。

同社は、「産地に足を運び直輸入～直販を行う」ことを掲げ、グアテマラやエチオピアで環境に配慮して栽培されたコーヒー豆を自家焙煎し、「さとやまコーヒー」のブランドで自社サイトや地域の協力店で販売しています。大西さんは買い付けのためエチオピアを二度訪問しました。



●「さとやまコーヒー」を飲むことで、コーヒー産地や男鹿市の里山再生に寄与できます

2人は、「農業は、農村の存続に大きく関わっているし、まちづくりだと捉えている。どうイノベーションを起こしていけるのかを考えながら、楽しんで農業をしていきたい。」と話します。



●耕作放棄地から畑に戻り野菜が収穫できるようになりました

▶ これから

「事業の地固めとしてコーヒー豆の卸先を開拓しつつ、耕作放棄地の復元面積の拡大と離農者からの農地等の引き受けにも取り組んでいきたい。ゆくゆくは男鹿の里山に人の流れを作るだけでなく、企業名のとおり秋田の里山を変えるような取り組みをしたい。」と、未来にも種を蒔いている2人です。



●今後を語る保坂さん(左)と大西さん(右)

(●印写真: 合同会社秋山里山デザイン提供)



あきたで生きる



発行:東北農政局秋田県拠点地方参事官室

住所:秋田市山王 7-1-5

TEL:018-862-5611